

- ◎「軽～い 山に行きましょう・・よ」「それじゃ 天王山・・」オレ、50 歳ころこの山にはよく来ていた。今日も 10 時に JR 山崎駅で集合して登り始めた。踏切を渡って山の方に入っていく、斜度のきつい舗装道路、「この斜面 車を運転して登る途中で止まると 焦るねえ 自転車は無理だ ジジババは 歩きづらいね」なんて思いながら住宅地を抜けていく。久しぶりに会ったジジババが盛んに話す、そう坂の途中で草団子を出しバナナを出し、「食ってくれ 重い」嬉しい叫び。
  
- ◎宝積寺（ほうしゃくじ：たからでら）の境内の中を通過して登山道に出る。昔はさっさと通り過ぎていたが、あらためて見ると三重塔がある、なかなかの塔じゃないかと感動。
  
- ◎天王山は明智光秀と豊臣秀吉が戦った場所としてあまりに有名、中腹にもその合戦を描いた絵巻がでっかく陶板にコピーされている。絵巻は面白い、甲冑を着けた戦士たち、親分の名前まで記してある
  
- ◎十七烈士の墓：「長州藩の烈士の墓」と思っていたが、皆さん長州人ではなく、土佐・肥後・宇都宮・・という出身の烈士である。蛤御門の変の後、長州軍が総崩れした後のしんがりを引き受け、ここで 17 人が自沈したらしい。幕末の尊王攘夷派（長州）と公武合体派（会津・島津）との戦いだとか・・。「ああ もう 教科書で習ったことなど 忘れてしまった・・」と大きく笑って終わり也。
  
- ◎白玉手祭来酒解神社くたまでよりまつりきたるさかとけじんじゃ>天王山の手前にある一角で、以前から、「なんなんだろう」と思っていた。大きな舞台のある社、能や踊りが密かに行われていたような雰囲気、夜に獣たちが化けて着飾り舞っているのかと想像するだけで楽しそう。
  
- ◎大山崎油座：鎌倉から戦国時代、大山崎から島本にかけ、荏胡麻から採った油を広範囲にわかって独占販売していた特権商人から構成された座があった。  
荏胡麻と胡麻は違う。荏胡麻は縄文時代から栽培されもっぱら灯油に使われたが、江戸以降、他の油に押され衰退した。  
胡麻は、胡麻科とまったく違う。
  
- ◎山崎と大山崎・・？島本町の山崎と、京都府の大山崎の区別らしい。
  
- ◎当初は天王山で弁当を食い、柳谷に向かって歩き、途中から小倉山荘を経て、阪急：西山天王山駅に行き高槻駅で下車して懇親会でもしようと思っていました。「でも もうちょっと 歩きませんか」「西山古道を案内します」「え その道知らないけど 連れて行って」ということで柳谷観音に向けて歩き始めた。
  
- ◎西山古道は、善峰寺・光明寺・柳谷観音の、洛西観音霊場を代表する西山三山を結ぶ古道で、道路ができるまでは盛んに人々が往来していたらしいが廃れてしまった。それを復活、整備してハイキング道となったようで、なかなか歩きやすいように整備、手入れがされている。
  
- ◎天王山から柳谷観音に向け歩いていくと、舗装道路が見え田んぼが見え明るく開ける。道路に出て柳谷観音の標識があるので、獣除けフェンスの扉を開け西山古道に入っていく。今回は、柳谷観音から光明寺方面に歩いたが、柳谷観音から善峰寺への入り口も見つけないといけない。ポンポン山も含めこのあたりは、続いているようだ。

◎産女行南山科値鬼逃語くさんするおむなみなみやましなにゆきおににあひてにぐること>第十五

◎鬼が老女に化け、その老女が鬼の正体を現す話は多いそうだ。

◎今は昔、ある屋敷に仕える若い女がいた。父母も親戚もなく、知り合いとてまったくないので、これと言って行く所もなく、ただ自分の部屋に籠りっきりで、もし病気にでもなったらどうしようと、心細く思っていたが、いつしか、これと言って定まった夫もないのに懐妊した。

◎ここまで読んで、現代ならそこらあたりの小さいアパートに一人で暮らす二十歳ぐらいの女、なんて想像してしまうが、この主人公には女童（めのわらじ：女中ではなく侍女見習いかな）がついている。平安時代の貴族の館にいた女、父母も親戚もないが、宮中につながる流れをもつ上流階級の女のはしくれかな。

◎この女は根が賢い女で、こう思いついた。「もし産気づいたら ただひとり使っている女童を連れて どころも知れぬ深い山に行き どんな木の下でもいいからそこで産もう そこなら もし死んでも人に知られずにすむだろう またもし 無事だったら そしらぬ様子で帰ってこよう」こう思ったものの、次第に臨月が近づくにつれ、言いようもなく悲しくなったが、素知らぬ風を装って密かに手はずを整え、食物など少し用意してこの女童に事情を言い含め、日を過ごしているうちに、いつしか臨月になった。

◎男のオレにはわからないが、腹の中で子が大きくなっていく、指ぐらい、こぶしぐらい、それが十月（とつき）もすれば赤ん坊にまで成長し産道から出てくる、「おぎゃあ〜」である。文化文明がいかに発達したところで、生殖だ、成長だ、食物だ、そういう動物の根源は変わらない。「あの男となら 子孫を残したい」「あんな男は絶対に 嫌だ」「いい子孫を 残すには いい男で なくっちゃ」女が男を物色する。男は、「女なら だれでもいい 生殖行為をしたい」こんな違いがあると何かの本で読んだ。それにしても今も昔も、「何かのはずみでできちゃった 望んだわけでもないのに」と困惑する話はよくある。

◎この女、「生んだ子を 棄ててもいい」と言っている。それでも子を抱いて命からがら逃げ帰っている、このあたりの情感はどう読んだらいいのか面白いのか、「そんなことはお前しだいだ」「ははあ」である。

◎明けきらぬうちにと女は出発して、粟田口まで歩き続け、山に入り北山科まで来た。古びて壊れかかった屋敷を見つげ中に入り込んだ。無人だと思った家から白髪のお婆が現れた。

お婆が来て、「嬉しいことじゃ このババアは年をとって こんな片田舎に住むみじゃから 産の穢れなど忌みはいたしませぬ 七日ばかりこのままにおいでください それからお帰りなされ」といい、女童に湯など沸かさせ、産湯を使わせてくれたりするの、女は感謝に堪えない。棄てようと思っていた子供もたいそう可愛い男の子だったので、棄てる気にもなれず、乳を飲ませて寝かせていた。

◎こうして、二三日ほどたって女が昼寝をしているところ、横に寝かせている赤子を見てお婆が、「なんとうまそうな ただひと口じゃ」といったように夢うつつに聞いた。

◎お婆に化けた鬼がいよいよ馬脚をあらわした。鬼は肉食なのかな、鬼の嗜好は図りかねるが、肉食主義者では面白くない。外国映画を見ているとの山を駆ける動物を捕まえ皮を剥ぎ上手く肉にして食べている。そのテン日本人は肉になった状態のものしか食べられない、屠殺解体ができない、これは仕方がないか。

◎今昔氏、最後の閉めに、「こんな古びた 一軒家に 一人で 入り込んではいけない」という。いつも思うが各話の最後の閉め、今昔氏の言葉が、現代の感覚、常識とずれていると感じることが多い。千年前はそういう考えが常識だったのか、作者が僧籍の人だからか、わからない。

オレなら、「うまい具あいに 子が産めてよかった 鬼から逃げおおせてよかった」というかな。

◎ICレコーダーをもって安威川河原にやってきております。開口一番、「えりゃあ 忙しい」この歳になって、次々用事が出てきている。少し前までは、あれをやってこれをやってなんて頭の中で段取りを考え、次々こなしていたが、今は無理だ、一日一つだ、あれやこれやなんてできるわけがない。ほんとうに思う、痛感する、回転能力が半減している。昔なら10時間12時間がむしやりに齧りついても平気だったが、今は1時間も持たない。まずは“かるた”がこたえたねえ、それでも何とか9月中旬に終わって一週間ほどして、「もう一つ 学校の校舎の絵を描いてくれ」「もうちょっと早く 言ってよ」「えええ もうそんな技術ない 忘れてしまった」とぼやきながら2度も学校に行って写真を撮ってよく観察をして描き始め今日やっと発送した。こんな絵も10時間もあればやっつけられたが、今は1時間ほどやっつけては別の仕事、掃除洗濯、また描く、延べ時間にすれば10時間ぐらいかもしれないが、こんな感じでちょちょッと十日ほどで仕事をやっつけた。

◎個展の準備、これも忙しい。今回の展覧会はコロナ禍の3年で画き溜めたぶんを並べようと思っている。先日の文学館と同様の並べ方を、奥の壁三面で考えている。20号の長辺：73センチをそろえて並べる。文学館ギャラリーでは30号の長辺：91センチを、赤い絵の具を使った絵を、そろえて並べたが、今回は一まわり小ぶりのものを、しかも色合いは緑と青の絵具をたくさん使った絵と考えている。大きさをそろえるとギャラリーの壁が冴える、これは見事に成功する、このレイアウトはいたく気に入っている。それと3・6・10号をそれぞれ10枚ずつ用意した。

◎何が忙しいかというと、車の件が一番忙しかったし、ストレスが溜まった。今オレが乗っている車は“ホンダアコード”である。アコードは衣川さんから15年目で譲り受け12年乗った。さすがに25年も経つとあちこちにほころびが出て、「こらあ 廃車かな」「もう2年 車検を受けるかな」と思案していた。盆の最中に、「後ろのライト 点いたまま」と言われ慌ててエンジンをかけてみた。よろよろとエンジンがかかった、バッテリーが上がってなくてラッキーだったが10キロほど走り回って充電した。車屋に電話をしたが、「盆でしばらく休み バッテリーの線を外し 止めておくと いい」と教えられ、この2か月乗るたびにエンジンルームを開けて線をつないだり外したりである。ただこの車、スポーツタイプらしく、よく走る、スイスイ走る、これはいいねえ。

◎「80万円で ホンダフリード が出ている しかもハイブリッド 見に行こう」とMさんに言われ見に行った。いい車だ、走りやすい、中も広い、もうホンダ車は嫌だと思っていたが、これなら乗りたいという気になった。ただその車、わざわざ二人で関空付近まで行ったが、譲渡の書類が用意できないというボケた返答を聞き断念した。

◎車を買う、100万もするものを買う、素人同士では難しい、友人同士なら気さくに、「事故や故障はなかった」「金額はいくら」と話が進むが、知らない人とは進めにくい。新車は高い、日本の車は300万円400万円が普通になってきている。

◎「もう 免許 返納する歳 だよ」と言われドキリとするが、「ヒヤリ とすれば やめよう 山と 車」といつも言っている。車を買うとなるとおおいにストレスが溜まる、ま、時間をかけるか。

- ◎またまたオーレン小屋に向かって走っております。虎溪山というパーキングでトイレ休憩、曇った空模様だけれど、明日明後日は晴れと確信している。「軽い山がいい きついところは登れないよ」そう言われ、16日～18日の三日間という日程は決まったが、「さてどこがいいかな」迷った末オーレン小屋なら駐車場からゆっくり歩いても2時間で行ける。山も硫黄岳ならなんとか登れるのではと決めた。
- ◎朝7時に茨木を出発して、諏訪ICから食料調達にスーパーに寄り、“唐沢鉱泉”とナビを入れたが、ナビ君迷いに迷って“美濃戸口”まで連れて行ってくれた。「こらあ おかしい・・・」今度は“尖り石遺跡”を入れるとなんと元の場所に出た。「キツネに ばかされた ような」と歯ぎしりしながら唐沢鉱泉の看板に沿って進み、“桜平”は右の看板で右に折れる。3:30に登山口までやって来た。ばかされた件を調べると、「一部のナビでは 別の場所に誘導されますので 三井の森を目指してください」と載っている。大迷惑を被って一時間以上車を走らせてしまった。
- ◎桜平の駐車場までの道はがたがた道、車の腹がこすらないかと心配しながらゆっくり走らせた。着いたぞと喜びながら登山靴を履き荷を分配して3:45に出発した。「1時間半の道 なるべく荷は軽く 食料は乾きものを多くして 軽く ね」オレも荷は軽くといろんなものを削り、テントと寝袋、防寒着などの衣類、コッヘルとボンベ、それらを家でパッキング、その時点でザックは満杯になった。あとはスーパーで買った食糧を小袋に入れ手で持った。
- ◎1時間半かかって、ふうふう言いながら小屋に到着、もう暗くなりかけている。ところが仲間の方々が来ない、相当遅れている、そんなわけで空身で迎えに行った。ヘッドランプを点け下っていくと三人がライトを点け座っていた。「おおい来たよ」「ザックが無いと軽い 歩ける」そんなことを言い合いながらザックを担いで登り返した。
- ◎早速テントを張り荷を分別して、「あそこの テーブルで 飯に しょうか」と食料、コンロ、食器を運び、ペットボトルに水を補給した。ガスの湯をつけ湯を沸かしテルモスに入れた。「いつもの鍋」野菜と豚肉、「今日は あまり 飲まずに 明日 飲もう」と言いながら焼酎やらウイスキーやらをちびり、豚鍋をいただいた、サラダをいただいた。「そらあ こんなものを 担いだら 重いわな でも 美味いわな」そんなときに、「オレの 豚が 少ない」「そんなことないよ 固まりよ」「いやあ 少ない」「3枚が くっついてるから そう 見えるの」「オレの 豚 少ない なあ」70歳代のジジババの会話とは思えない話しぶりに腹を抱えて笑ったが、「それじゃ 返そうか」「そんな齧りかけ 返しちゃ だめ」とまだまだ続く。
- ◎二日目：朝6時に目覚めた。よく寝た、ぐっすり寝た、一度だけ目覚め、「ここは どこだ」「ああ テントか」とまたすぐ寝入った。トイレに行きたいので起き上りテントのジッパーを開け登山靴を履いた。空は赤っぽいような、青っぽいような、雲が少し、小屋の煙突からは白い煙がポコポコ出ている。
- ◎テント生活で邪魔くさいのが外に出なければならない時、「あ あれをとってこなければ」なんてことも含めトイレに行かねばならないことだ。寝袋のジッパーを開け起き上がって、テントのジッパーを開け、テントの中の靴を外に出して履く。今回のように荷が多い時はスリッパも持ってこれない、仕方なくその都度登山靴を履き外の用事を済ませて寝袋に収まるまでの行程を踏まなければならない。頻尿気味の方にはテントはつらいね。二日目の夜はオレも二回トイレに行かなければならなかった、それほど眠りが深くなかったもので、何度も目覚めた。
- ◎小屋付近は-5度ぐらいになったかな、外に出していた水が凍っている。食事は昨日と同じテーブルでパンを齧り、スープを飲み、コーヒーを飲んだ。大阪を出発する時から冬用のシャツにタイツを着込み、ダウンの上から雨具の上着を着てちょうどいい、寒くはなかった。まだまだ真冬の雪山ではない。
- ◎8時にテント場を出発“赤岩の頭”から硫黄岳を目指す。夜を過ごしたそのままの恰好、ザックには行動のパンとカップヌードル、テルモスに湯を入れ、水も1リットル担いだ。歩き出してまずはダウンを脱いだ。地面は濡れている、暗い樹林帯の中もくもくと歩いていく。

- ◎樹々が少なく小さくなってきた、硫黄岳が見えてきた、朝の太陽がキラキラ、夜露がキラキラ、石ころがキラキラ、苔がキラキラ、木の幹に陽が当たりその裏側が黒くキラキラ、いい色でありいい姿であります。
- ◎硫黄岳のただっ広い山頂にやって来た、爆裂口が見える、ケルンが見える、ここは何度来ても素晴らしい。若いころは景色もろくに見ずに早足でたったか歩いていった、何を急ぐか飛脚じゃあるまい、と思うがそれが数年前までの登山スタイルだった。山はじっくり見渡すと、「あそこは あんな気色だったのか」「これはこうだったのか」気づかなかったあれやこれやが見えてくる、そんなあれやこれやを堪能している。
- ◎ハケ岳の噴火は縄文人は体験しているのかなと調べてみると、溶岩の分析でおおよその噴火の時代がわかるらしく、爆発しているハケ岳、赤い溶岩を垂れ流しているハケ岳、煙の上がるハケ岳を人々は見ていたんだ。
- ◎夏沢峠まで下りてきた、「ここで カップヌードルを 食べましょう」皆さんそれぞれ朝に配られたヌードルにテルモスの湯を注ぎ3分待った。ヌードルを食べ、パンを食べ美味しい昼飯が終わった時点で皆さんは満足してテント場に帰るといふ。オレは、「それじゃ ゴメン 天狗の方に 行かせてもらうよ」と別れて単独で歩き出した。箕冠山(みかんぶり)までは樹林帯が半分右に爆裂口を隙間から見ながら小一時間歩いた。
- ◎「時間がないので 根石岳あたりでも いいかな 無理せず 今日は 楽しもう」そう思いながら樹林帯を抜けると、目の前の天狗の姿が見える、樹々の無い石の世界青い空と白っぽい石と砂、左手に根石岳山荘、根石岳の向こうにポコポコ二つの天狗岳、この景色も見せてもらって嬉しい限りである。
- ◎歩き出すと歩けるじゃないと欲が出てきて根石岳から歩きだした。岩ゴロゴロの登山道、スイスイと飛ぶように下っていたのは若いころ、今は三点確保で一歩一歩足を下ろしていく。次のピークは巻き道だ。巻き道とはピークを登らずポコリンのすその道を歩いていく。もうここまでくれば 30 分もあればっぺんだとゆるり上っていく。
- ◎もうちょっとだと休んでいたら、あんちゃんが登っていく、ガスが上がってきた、東の方“シラビソ小屋”側から白い雲が上がってきた。すぐそこがっぺんだと思いながらも無理せずに帰るか決め下り始めた。このガスこのままスイ〜と消えるか、またたく間に全山を覆ってガスの山になるかこれはわからない。
- ◎昨夜オーレン小屋に着いて仲間を迎えに行こうとヘッドランプを点け下っていたら、後ろから来た元気そうな人が声をかけてくれた。こうこうで迎えに行きますのでと話す、「あったら 伝えておきます」と降りて行かれた。根石小屋の方でスタスタ慣れた道を下って行った。「今小屋は改装中で 昼食はやっていません」とおっしゃった。根石岳山荘の横を通っているがトントン金槌の音が聞こえる。昔はなんだか小さくきたない木造の雰囲気のある小屋だったが今風の外壁と屋根、外国のロッジの感がある。
- ◎ゆっくりしているとだんだん夕方の雰囲気になってきた、西から射す傾いた光が赤味を帯び風景をくっきり陰と陽に分け黒と白に分け、白い部分が赤く光る。だんだん夕方が進んで行く、硫黄の火口一部にガスがかりこれまた幻想的な雰囲気が出ている。
- ◎4時半ごろに小屋に到着、「ビール飲む？ われわれはもう 飲んだよ」缶ビールを買ってきていただきゴクリ飲んだ。「そんなじゃこのまま 晚餐に しょうか」「今日は アルファ一米と レトルトカレー それと レタスとトマトのサラダ」「おお 豪勢だねえ」焼酎とウイスキーも飲み暗闇に包まれていく。
- ◎夕方の4時過ぎはまだ暖かかったが暗くなるにつれ冷えてくる。翌朝の朝食はスープとパンとサラダという洋風スタイル、これも美味いねえ。テントをたたみ始めたが霜でズックリ濡れている。翌日大阪の自宅でテントやシラフを干すときには水が滴っていた。ボンベも寒いので3本近くを消費した。
- ◎9時に小屋を出発、下りは楽だといいいながらも皆さん重い荷で少々ばて気味。車に到着して着替えまずは風呂に向かった。風呂は“尖石縄文考古館”の近所“尖りの湯”に入った。茅野市民は400円、以外のは600円也。飛び切り熱い湯に何分か浸かって疲れをとった。オレとしては運動量が少ないので筋肉痛も少なそうである。蕎麦屋に入ったが1時間以上も待たされたが、美味かった。
- ◎6時ころ帰れると思っていたが帰り着いたのは8時頃だった。

◎安威川河川敷に来ております。今日は左岸、目垣のゴルフ打ちっぱなし場から、171号線を超え市民プールの下から引き返そうと走り出した。もう10月の下旬だ、一週間で11月だ、月日の過ぎるのは早い、展覧会まであと一ヶ月である。今は太陽が一番元気な午後2時、先日までならとても立ってられない極暑の太陽がギラギラの時間だが、今日も太陽光線は熱くあたるが風が涼しい、長そでシャツでさほど汗もかかず、「えんやころ早足だ」と上流に向かっていく。このあたりは市街地に近く土曜日曜は人が多く敬遠するが平日はまばらで10人20人の人に会ったぐらいかな。

◎昨日、運転免許証の高齢者講習に行ってきた。「認知症テストがある これが難しい・・・」という友人もいて、直前に検索しなくてはと考えていた。何日か前に友人から、「これあげる 読んで 調べたら」と渡された紙には40ほどのブツの名前が書いてある。「え これ 覚えるの・・・？」この単語を見たときに、「オレはこういうのは苦手だ こんなもん覚えられるかい なんでこんなもん 覚えな いかんのだ」オレは記憶はダメだと悟った。先日来、「IQが抜群に高い」と言われるが、IQの試験にはこういう記憶するという項目がない。「オレは単純な単語を丸暗記する 能力は 低いのだ」とあらためて知らされ、勉強が好きではない原因はこれかなとも痛感した。熟年になって古典文学を読み始め、5年も経った頃から、「若いころ 習った 古典文学の イロハぐらいが役にたつ」そう言うようになってきた。それこそ単純な単語、人の名や地名は覚えませんが、文章の流れ、情感、空気、そういうものおおいに感じる。単純な単語、人の名や地名を理解し、歴史を整理し、空間時間を把握するには絶対必要だ、が、これは別のご仁にまかせておこう。

◎講習会場には20人ぐらいの72歳以上の老人がいた。教官がいうにはかつて94歳の元気なジジイがおられたらしい。「みなさん 3年後もまた ここに 講習を受けに 来てください いつまでも 元気に 運転してください」ということだったが、実車での実技では、「一旦停止では 完全停車はしていない」と3年前と同様指摘された。街を走っていて、一時停車は守っているつもりだったが、あれも完全停車ではなかったのかもしれない。今回の講習会では20人全員が、認知症・目の検査・実技の三点でパスしたらしい。この講習会が7500円、茨木警察での運転免許更新では3000円ぐらいとなかなか高くつく。誕生日前後に更新だ。

◎河川敷で水の流れの中、シラサギが前後左右に動き回り夢中に水面を見ている、そのすぐそばで鵜が潜っては顔を上げまた潜る動作を繰り返している。これはシラサギと鵜の共同作戦で魚を追い込んでいるのか、だって鵜のあんな不自然な泳ぎ方は見たことが無い、と言いつつ、シラサギが魚を啜る姿も見せないし・・・と見つめながら通り過ぎた。白いサギは、ダイサギ・コサギ・チュウサギの3種類だそうだ。

◎某市公園科発信：サギの群れと鵜の群れが共同作戦で魚を捕らえていることがよくあります。食欲旺盛な鳥たちが魚を次々まる飲みする姿は圧巻です。オレがよく来る安威川河川敷では、サギ類、鵜、カモ類が集まって日向ぼっこをしているが共同作戦の姿はあまり見ない。安威川でもどこでも、鵜は潜ると長らく浮き上がってこず、時間が経って離れた所にポコリと顔を出す。休んでいる時は羽を広げて乾かしている。

◎先日トヨタの方が、「廃車 ビックモーター以外のどこかに 連絡してみては」と教えてくれたのでパソコンで最初に出た“カーネクスト”のページから入ってみた。いろいろ書かされ送信して5分も経たずに、若いあんちゃんから電話があった。「1万円ではいかがでしょうか」「1万円なら わざわざ来てもらわなくても 近所のガソリンスタンドに持っていきから 結構です」「いえいえ ちょっと待ってください いくらならいいですか」「ボロ車なので いくらでもいいが・・・」この話を繰り返し、「ちょっと上司と・・・」「5万円ではいかがでしょうか」「え 5万円 ボロ車だよ 知らないよ」「それじゃ1週間後にドライバーを行かせます もしそちら様の都合で キャンセルの場合は 3万円いただきます」廃車は、いつも車検をたのんでいたオートバックスで無料、ガソリンスタンドで1万円、別の車屋さんで3万円だった。5万円もいただけるとは・・・。

- ◎展覧会においでいただきありがとうございます。ここの画廊もほぼ毎年使わせていただいていたのですが、コロナ禍の3年間休止していました。まもなく77歳というジジイになっております。この歳になるとたった3年の間に、「え あの方が・・・」と友人知人の姿が見られなくなったという数字が増えてきております。オレ自身も、「岡村の姿が 見られなくなった その時まで 絵を描き 自然を愛でていたいものだ 絵と山だ」と生きていきます。とはいえ山もいつまでも登れないし・・・。
- ◎コロナ禍の3年間で、ゆっくりやっぺいこう、じっくりやっぺいこう、というライフスタイルが身に着き、こういうゆっくりした生き方もいいものだと日々過ごしておりましたが、さあ展覧会となると、あれもこれもと雑多なことが次々に目の前をよぎり、焦り、冷や汗をかく、こんな感覚は久しぶりだと着いていくのに四苦八苦です。若いころなら次々の雑多を、「ああだ こおだ」と簡単にこなしていたが、この忙しさ、「こらあ アカン おちつかない」なんて思っております。
- ◎5月にもオレの地元の茨木 “茨木市立川端文学館ギャラリー”で展覧会をしました。その時は今回よりちょっと大きな絵“赤い絵の具”で描いた絵を並べました。今回の展覧会は“青い絵の具”で描いた絵を中心に並べるぞと決めました。青色とはいえ緑色も含まれます、青と緑で見せます。
- ◎山もたくさん登らせてもらいました。「山に行って 絵なんか 描きませんよ 山はただ 楽しむだけ」よくひっくり返るし、道に迷うけれど、最近ではヒヤッとしたこともなくゆっくり歩いています。年に一二度信州方面にも行きますが、近畿の山もよし、信州の山もよし、山はいいですよ。ただ体力が無いとしんどいだけ、何時間も歩き続けられること、登ったら下りのことを考えないと、無事に帰ってくるのが大事。「ジジイは ひとりで山に行っちゃだめ」とよく言われるが、付き合ってくれる方がほとんどいなくなった。
- ◎絵具箱には、30色ぐらいの絵具が入っています。ひとつの絵を描きあげるのに使う絵の具は、5.6色ぐらいかな、それだけあれば多すぎるぐらいだ。
- ◎歩いていると前方に鹿の群れ、10頭ぐらい居たかな、オレに気づいて慌て左右に散った、尻の白い毛がよく目につく。そうだ、今日は“熊よけ鈴”を付けていなかった。
- ◎絵具箱の赤色は5.6色もあるかな、主に使うのは“まっかっか”と“黒っぽい赤”の2色。それに仕上げでは、“まっかっか”の兄貴分と“黒っぽい赤”の姉貴分ぐらいかな。
- ◎チューブから出したままの絵具はねっとり、それをそのままキャンバスにひっつけると力強い画面ができる。絵の具をしゃぶしゃぶに薄め、それをキャンバスに塗り込め、たらしこむと、水っぽい画面が生まれる。
- ◎石が積まれたケルンの横、「国地院」と彫られた三角点で昼飯だ。弁当は昨夜、玄米ごはんの手造りの梅干しを入れ、胡麻を振りかけた。おかずは野菜とベーコンと卵を炒めた。
- ◎北向き斜面のこのあたり、5センチ10センチの雪が凍てつき、オットト、コラシヨ、登りはひっくり返らなかつたが、下りは凍った雪を踏みつけ、何度もすってんころりんだつた。
- ◎青と緑、それぞれ3色ずつぐらいの絵具がある。長く絵を描いてりゃ、お気に入りの絵具がある。そればかりを使って描いている。そいつらを使うと、キャンバスにピタリとひっつくからね。

- ◎ウルトラマリン：群青色、この色を気にいってよく使う。この色はかのフェルメールが使った色、ラピスラズリという宝石を砕き粉末にした、金より高い絵の具だったそうだ。
- ◎青：日本人は緑色のものも青という。青りんご<green Appele>青信号<green lite>。古代の日本人には、白・黒・青・赤の4色しかなかったとか。虹の七色を決めたのはニュートン（1600年代）らしい。
- ◎エンヤコラどっこいしょ。扉の無い避難小屋の中は零下6度だ。真っ白の雪、樹々の枝々に雪がへばりついている。湯を沸かし、弁当を広げ、暖かいみそ汁を飲んだ。
- ◎おお、ギンリョウソウを見つけた。青白い白色、これを見ると幸運が来るぞと勝手に思っている。腐生植物だそうで、ユーレイタケともいわれる。ほんとに幸運が来るといいね。
- ◎若いころに下手くそながらデッサンをやり、人並みに人体やら生物やら風景の絵も描いた、それがどんどん抽象化していき、今やどこに形があるのか、どこが具象なんだ、と言われるような表現になってきた。
- ◎「これは なんの 絵 犬 カエル」こうおっしゃるご仁が、よくおられる。いつも苦笑しながら、ホホホと笑っている。「絵は 反対側の脳で 見て 感じてくださいよ」ホホホである。
- ◎友人えかき、「気になる絵 上手い絵」その方の展覧会を見てそう思っていた。考えつくして描き込んで、絵はあっさり出来上がっていた。いい絵を描く仲間が亡くなった。
- ◎石の山、石がゴロゴロしている、「さ 帰るべ ゆっくり 下ろう 慎重に」三点確保、四点確保、石をつかみ、石に手を突き、そっと足を下ろし、次の足を下ろし、滑らないように確実にゆっくり下った。
- ◎絵は説明してはいけない、化粧のし過ぎも行けない。絵の中で「ここはこうだ ここはもっと華麗に」と執拗に過度な表現はダメだよ。
- ◎いい絵と上手い絵がある。上手い絵はだれが見ても、「きれい じょうず よくわかるね」と文句はない。だけど、「いい絵」を描かなくちゃ。いい絵なら 「きたない へた わからない」でもいいことないか～あ。
- ◎尾根道に陽が射し、濡れた苔が緑にみどりにみどりしている。「この みどりは キレイ 道くさ くて しかも ご褒美が いただけた」まだまだ樹林帯だが、360度の展望が開けた。
- ◎美人の賞味期限は10年20年だ。20年が経った頃に“ブス”といわれた方々が俄然輝きだし、魅力にあふれる大人になっていく。「え あれは あの子 あの方」と逆転する、ほんとうだよ、ほほほ。
- ◎緑色は植物の葉っぱの色、葉はどこにでもある。それこそいろんな緑色、若葉、夏の葉、透き通った緑色から濁った緑色、光った緑色、うぶ毛の生えた緑色・・・。オレが使いこなせるのは、3、4色かな。
- ◎名も知らなかった渋い山にテントを担いで入った。渋い山とは、にんきがない山、人は少ないが入ってみるとなかなか魅力的な山である。夜は満天の星が輝いていたらしいが、オレは眠気に勝てない、見てない。